

日本文化原論シリーズ (全 5 巻)



著者 横山 俊一
Syunichi Yokoyama
美粋書房
Bisui-shobo

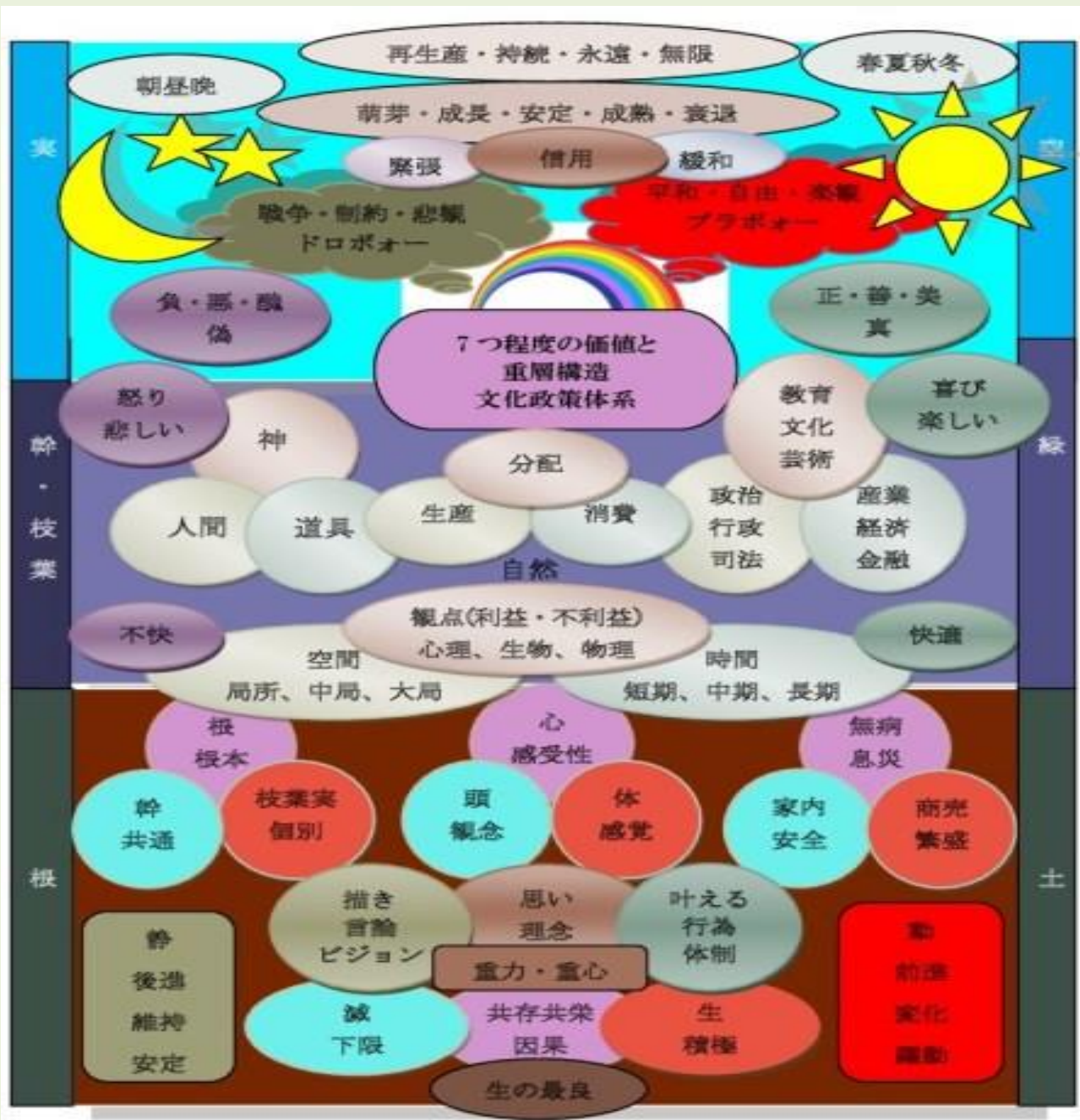
I. 神からのブラボー

人間の究極的理想は「不滅」であり、有限を無限に変えられることに、最上の価値が備わる。生物物理的な性格から有限を宿命とするように認識される。過去の現象の繰り返しの事実を反映して、この静態的認識が起こる。高い確率で起こる現象をもって事実と法則性という確信性が起こる。しかし、これで留まる必要もなく、無限への可能性を追求するような発想が残されて、健全とも映し出される。最高の理想概念をもって、無限への可能性を浮かべ、探究するようなエネルギーから人間の価値が向上する。「人間が空を飛ぶ」等という事も、おそらく、「無理だ」という認識が常識であり、そこに無限を求め道具を開発し、今日では当たり前のように空を飛び空間を移動するまでに及んだ。こうした無限への可能性に「希望や夢」なる概念が起こり生きる活力が出現する。目先の欲求は食べる事や着る事に照準が定まる。これを遂げるには人々の欲求を充足する生産をもって対価を得て必要な事物を購入し、体内へ吸収する定式が起こる。この中で、人々ができないと思っていることを、できるように変えれば、そこに欲求が起こり供給と需要をもって糧を得られ生存に繋がる。「出来ない事が出来るようになった」という発明と開発には多大な報酬が与えられる。「永遠の生命」という欲求に対して、出来るようになれば最も莫大な報酬が得られる。このような問いと探求から、文化という変わりづらい欲求が起こり、それへ及ぶような様式を見出し文化の実現と解される。今のところ、永遠の生命を遂げるには及ばず、考え方や各種ノウハウや感性の良質性というアウトプットが、無形の財産と繋がり、代を跨いで継承され有限の生物性を超える「無限的な意思の繋がり」等と説かれる。又は、「全知全能」なる概念が出現し、なんでも知っている。思うようにできる等という理想が浮かび上がる。この欲求について、遂げられるような創造性が起こり、その中に「永遠の生」なる欲望も含まれる。言い換えると「永遠の動」となり、自己と外界の止まらない状態をそのまま認識できることにおいて、外界の危険からの回避への可能性も向上し、或いは外界からの良質的要素を確実に吸収する事へ至る。感覚的感性的な一次現象の不動的な認識と行為から内外の止まらない動態が掴み出される。過去の経験から知識という静的認識が起こり、同じような条件で同じような現象が発生するという仮説が生まれる。繰り返し反復的に同質現象が起こるほどに、「法則性や原理」なる知見に及んで科学的な現象と知覚される。しかし、究極的には、同じ条件であることは無く、少なからず内外の事物は変動にある。変動の中で意図する結果に及ぼせるためには、動である内外について、動であって動を生み、究極的な操作性を遂げる。こうした究極性の理想概念が備わり身体の高齢化や精神的な活力の減退から能力的な下落を生むことへの認識が備えられ、自己を冷静に認識し不足を補う発想に回り、健全な内外関係を遂げる道筋が描かれる。怠慢な性格が進むほどに「絶対」なる言葉を容易に用い断定するような表現を生む。実際と異なる現象が起こり、肥満な人間性の認識へ及んで反省へ回り態度を改める周期性が起こる。科学技術への過信や肥満な欲望の傲慢性と至って究極的真理への感度が下がり、不快性の現象に対面して謙虚さと探求心の持続へ回る。粗雑な表現をもって内外を欺き糧を得るような性格が深まり、人間性の劣化が多発する。生を出現させることは少なからず他の生を滅する相関になり、より良き生を作り上げる意識に及んで生命観への重みある態度が出現する。自愛が激しく他愛への意識が弱まり粗末な生産や態度に陥る事への適正化の視点が起こされる。道具の力が向上して依存するほどに人間の生身の探究力が弱まり粗雑な態度が出現し、内外からの不快感となって跳ね返り生存への力を弱められる。こんなような因果性が繰り返し発生する自然と社会の法則性と定立され、適当な発想や判断、行為を見出すことへ回る。究極的理想なる概念への探究と認識が持続して、有限を無限に起こす気力を続け内外との良性を遂げられる。慢性化した肥満症やマナー化した習慣などから「絶対」なる感覚が深まり意図しない負の現象に対面して、大きな被害を招くようなことに及ばぬ、予防的な観念となって究極的理想概念が作用する。「永遠の生」「永遠の動」「全知全能」「有限から無限」等の概念が描かれ不健全性への流れに適当な制御や発想が生まれる。こうした動態に「真理の探究軌道」なる概念が充てられ、留まる事のない向上心や好奇心を湧き立たせ、希望を抱き、熱を投じる態度から永遠の生への道が進められる。「人が人に指図して、欲望を遂げる」という行為について、同じ平等の認識を浮かべ、生命への重みが備わり、持続的な真理の探究というエネルギーが出現する。生命への平等意識からより良き生を出現させる力へと変換される。根本的不動性の良質化策という原理が描かれる。神を祀り神に近づけられるような発想を切らさずに謙虚な探求への習慣が内蔵される。「自然、人間、道具」に対して「神」なる存在を緩やかに浮かべ、健康な人間を作る方法へ進む。そして、いつの日か「神からのブラボー」なる声に到達する。

Ⅱ．七色の虹の架け橋

人間には、「良いや悪い」という二つの対極的な判断や心象が作られる。「良い」は、プラス的な認識と建設性の流れを生み、前進なる概念が起こされる。「悪い」はマイナスとなって後退的な発想や守りへの意識が強まる。これらを分ける「普通」という基準が備わり、基準との過不足から良し悪しなる配置が作られる。食べ物を食べ、「旨い」と感じる事は、「良い」に相当しエネルギーが沸く。逆に「不味い」となっても、エネルギー補給の面では満たされ、機能的な力は生まれる。食べ物を作ってくれた人は、自己の好みを良く鑑みて、旨いものを提供するか、まるで嗜好を伺わずに、喜びの表情を浮かべずに、逆に、悲しい表情を求めて不味い食べ物を作る事も想定される。このように、生物物理上の因果性が浮かび上がると共に、心理面での因果を起こす主要な現象への認識が作られる。これが観点という思考を起こす概念と備えられ、基準と誤差を形成する骨格的な構図と描かれる。「良し悪し」という感覚や心象が生まれる根源性は、生命の増進性と後退性の因果を根に発生する。生命の前進性や躍動的な状態に、喜びや楽しさ、快適感を浮かべ、生命の萎縮性や閉塞性、減退感に、悲しさや怒り、不快を抱く。この基本的な因果方式を基礎に、各種個別場面での直接的な「良し悪し」が生まれると共に、事実形成の因果性が掘み出され、問題や好感の生まれる原因が特定されて、負は削減や予防、正は伸張性の流れを起こす。この直接性から間接の因果を広げて、事前予防的な手立てを講じる思考力が作られる。直接の実感に及ぶまでの幾多の工程や連なりを思い浮かべながら、不快へ及ぶことのない上流工程へ視線を送り、予めの施策を投じて最悪的な因果への回避を図る思慮と行為が作られる。観点の多様性と共に、直接間接の因果を浮かべ、複雑多様な相関を抱くと共に、良し悪しへの感覚や心象も、単純なことから複雑な変数をもって形成される事柄などが起こされる。「二項対置概念」に対して、自然や人間、道具という主要なプレーヤーが知覚され、生物、物理、心理という因果性を起こし、且つ直接間接の現象という相関を浮かべ、そして正は負との相対で抱く事や、絶対性の基準から見る正負の判断などという構図を生む。「良い悪い」という集約的な態度へ至るまでに、多種多様な変数と組み合わせが起こり、判断へ及ばせる様相が確認される。物理感覚で慢性化される体質が深まるほどに、物理的効用への意識が高まり、短変数化した算式と判断を作り、即効的な快不快や喜怒哀楽を強められる。これによる争いの過敏性への危惧が高まり、生物的な仕組みへの問いや心理的良性を求め最適解を作る発想へ及び、持続可能な中長期性の算式を求める態度が進められる。破滅性の流れに適當さを起こし、持続的な再生産を編成し好循環軌道を図り、エネルギーのプラス的な発想が上回るような創造性へ至って、長きに渡る利益を享受される。単純二項の判断から、七色程度の観点を常態させ、虹の橋を架けるような創造性へと発展し、成熟した物事の知見の形成や探求心が向上する動態が描き出される。人間の幸福感を作り上げるには「七色の虹の架け橋」なるビジョンが描かれる。





Ⅲ．洗練集約版

個別現象の体験から、感覚や感性の因果を経験し、何をするとどうなる」等の知見が積み重なる。「何を意図して、何を投げ、どうなった」という生産性へ及び、仮説と検証のサイクルから確かな実感を経て、反省と学びの周期へ回る。この個別体験が積み重なり、個々のパターンを得ると共に、同質性の現象へついて集計し、一般化する法則性が見いだされる。データの分析へ及んで、自己の志向性への傾向なども整理しながら、技術と効用や影響への知見も積み重なり、変わりづらいつまみの形成へと実感が強まる。それを基準にした個別現象の出現という流れへ進む。こうした作業が、いわば「洗練集約化」ともなり、自己を知り外界を知り意図する制御を果たす人間力の向上と掘み出される。個別データの集計と規則性をどのように纏め抽出するか、この作業に見られる自己自体の感性を知るに及び、自己が何者か、自己自身で自己を知り、外界との接点を浮かべ交流を果たす創造の循環軌道が掘み出される。仮説と検証から意図する結果に及んだか、その程度の測定をもって客観的な事実を掘み、足りない部分への反省を浮かべ、より良き成果へ到達させる持続的改善の意欲が起こされる。根本的な価値観なる人間像の形成などへと高まり、それをもって自然や道具への在り方を浮かべ、意図する人間と自然と道具の関係を仮説とおこし、特定技術を形成し投じて、検証と改善を果たすサイクルが生まれる。メリハリ感をつけ、活動への成果を遂げる緊張の持続と緩和の周期をもって、より良き力が途切れずに継続する。歴史と理論の相関に及んで、動と静の相関が掘み出される。洗練集約化させ筋肉質な基準をもって、力強い動を起こし意図するビジョンへの歩みが進められる。当該執筆活動も、日本文化原論Ⅰ、Ⅱを経て、個々の観点と理論が積み重なり、これらを洗練させる事へ意識が起こり、纏められた文章になります。確かな自己の価値観を浮かべ、理論化を果たし、問題や好感現象への確からしい評価感覚が進んで、理想への方法が強められる。節目、節目での価値体系を描き、価値を実現する力が起こされる。

Ⅳ．人類永続への方途

この版では、生滅不可分と最良の生という根本原理と、その具体性を推し進める探究へと及びました。根本性の原理に対して、民主主義なる概念の明瞭な位置づけと、平和主義なる概念の形成と民主主義と平和主義の連結に及ばせ、人間の創造力への確かな軌道を浮かび上がらせることをもって、人類永続への方途という主題へ到達させるストーリーが描き出される。

Ⅴ．永遠の動態という静態原理

この完結版におきましては、日本文化原論Ⅳでの大きなストーリー形成を受けて、これを実現する教育文化作用の性格を深掘りして「教育や文化」の生産領域の意義や役割を鮮明に浮かび上がらせることに及んだように思います。文化政策の概念と体系が精緻化されてゆく。

日本文化原論Ⅰ 神からのプラボォー	日本文化原論Ⅱ 七色の虹の架け橋 (全十一編)	日本文化原論Ⅲ 洗練集約版	日本文化原論Ⅳ 人類永続への方途	日本文化原論Ⅴ 完結版 永遠の動態という静態原理
				
2014 年 5 月発行 ISBN 978-4-434-18854-1 文庫 311 ページ 290,638 文字ほど 760 円 著者 横山 俊一	2017 年 2 月発行 著者 横山 俊一 (前編) 第一編 生産性の具象化 第二編 主体 第三編 人間学の要諦 第四編 集約編 第五編 総論 第六編 基礎 (後編) 第七編 活動観念 第八編 主体性学 第九編 生産原理 第十編 動静概念 第十一編 真理の探究	2017 年 2 月発行 A5 サイズ 87p 51,533 文字ほど 793 円 著者 横山 俊一 序章 インテリ気取りの薄ら バカ 一章 創造の法則性 二章 根源性と全体観の探究 三章 長期利益軌道 四章 人間平等と繁栄 五章 真なる調和への道 六章 生産性の認識と解説 七章 文化政策の実施 図表 あとがき	2017 年 2 月発行 A5 サイズ 50p 34,975 文字ほど 880 円 著者 横山 俊一 はじめに 第一章 現況認識 第二章 方法論 第三章 方法の深まり あとがき	2017 年 3 月 11 日 A5 サイズ 168p 112,003 文字ほど 1,145 円 著者 横山俊一 1.ご挨拶 2.長期ビジョン 2-1 文化政策 2-2 永遠の動態という静態原理 2-3 健康体の基礎 2-4 教育文化原理 3.日本文化原論Ⅲ 4.日本文化原論Ⅳ 5.目録集 6.プロフィール